

褐毛和種種雄牛のサイズの変化

住尾善彦・守田 智・野田伸司・木場俊太郎 (熊本県農業研究センター)

Yoshihiko SUMIO, Satoru MORITA, Sinji NODA and Shuntaro Koba :
Changes in size of Japanese Brown sire

褐毛和種は役用種から肉用種への転換に伴い、肉用牛集団育種推進事等の推進により産肉形質の改良が図られてきた。この結果、サイズがかなり大きくなってきた。一方、主に肉質重視の面から去勢牛による牛肉生産が主流となったが、その仕上げ体重の決定や繁殖牛のサイズの検討等において種雄牛のサイズは大きな指標となる。したがって、その変化を明らかにすることは効率的な牛肉生産を図る上で重要であると考えられる。そこで1968年から'87年までに生まれた種雄牛42頭を用い、体重、体高及びかん幅によりサイズの変化を検討した。

1. 試験方法

1968年から'87年までに生まれた種雄牛42頭を生年月日によりⅠ期：1975年以前、Ⅱ期：1976年—'80年、Ⅲ期：1981年—'85年、Ⅳ期：1986年—'87年の4期に区分して、体重、体高及びかん幅の完熟値(最大測定値)の変化によりサイズの変化を検討した。

2. 結果及び考察

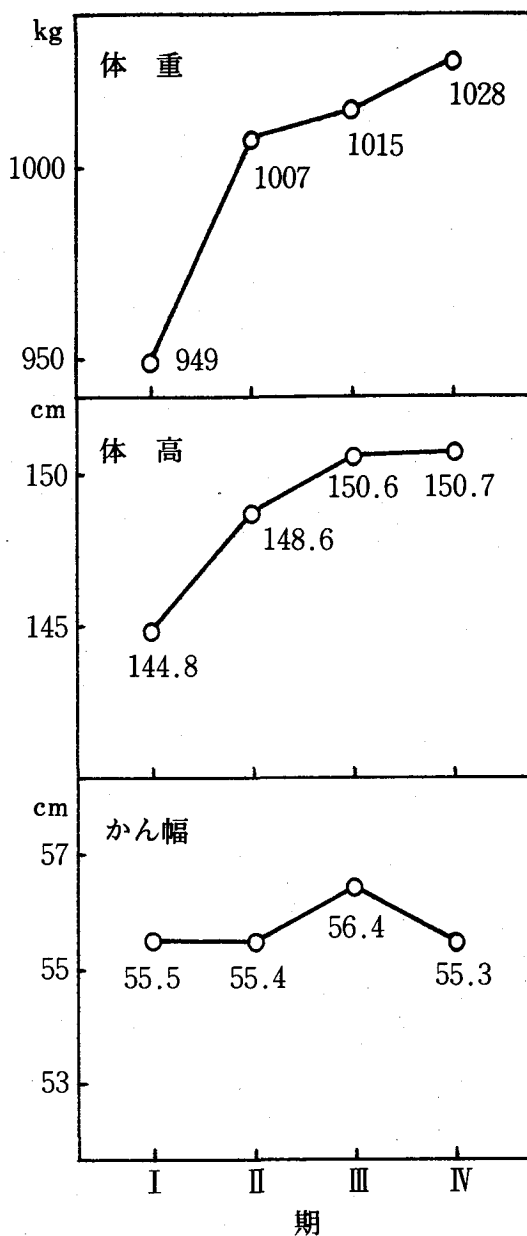
結果を第1図に示したが、体重は 949 ± 71 、 1007 ± 64 、 1015 ± 59 、 1028 ± 55 kgと大きくなっており、Ⅰ期からⅡ期にかけての増加が著しかった。また、Ⅰ期のばらつきがやや大きかった。体高は、 144.8 ± 3.2 、 148.6 ± 1.2 、 150.6 ± 2.9 、 150.7 ± 4.8 cmの変化を示し、Ⅲ期までは着実に大きくなったが、Ⅲ期とⅣ期はほとんど変化がなく、Ⅳ期のばらつきが大きかった。かん幅はⅢ期でやや大きかった以外はあまり変わらなかった。

このように、昭和60年代(1985年)にかけて体重や体高にみられるようサイズがかなり大きくなったことは明らかである。このことは、生時体重の変化¹⁾やフィールドの肥育成績²⁾における良好な増体性にも現れている。その後は、平均としては大きな変化はないが、体高でばらつきがやや大きくなっている。このことは、牛肉の輸入自由化に伴い、種雄牛の選抜においてサイズの大きさよりもあるいはきょうだい牛等の肥育成績に基づく品質を重視した選抜への移行を示すかもしれない。

先にも述べたように、このような変化を明らかにすることは効率的な牛肉生産を図る上で重要であるので、これからも追跡調査する必要があると思われる。

引用文献

- 1) 守田 智・住尾善彦・木場俊太郎：西日本畜産学会報 35, 36—38, 1992.
- 2) 社団法人日本あか牛登録協会：あか牛優良雌牛選抜法確立ならびに交雑種肉質調査報告書, 1—20, 1991.



第1図 褐毛和種種雄牛のサイズの変化